

マイノリティの集合体として見る 現代イスラエルのユダヤ人社会 ～異文化コミュニケーションの視点から～



東京大学大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻 特任研究員 鴨志田 聡子

1. はじめに

2023年10月7日のハマスの襲撃以降、イスラエルの首相ベンヤミン・ネタニヤフ氏は「我々は勝つ」というメッセージを発信し続けている。しかし、ハマスとイスラエルの戦争は開戦から9カ月以上経ってもまだ終わりは見えない。戦争直前までイスラエルにはネタニヤフ政権を激しく批判していたユダヤ人¹が多くいた。しかし、ハマスの突然の襲撃に驚き、怒り、さらなる襲撃の可能性に恐怖を感じたユダヤ人たちは、内部の争いを一時棚上げし、外部の敵と戦い始めた。「今はユダヤ人同士で争っている場合ではない」という意識が瞬時に広まった。やがて反対の声が激しく上がり始めたが、始まった戦争はなかなか止まらない。

ネタニヤフ氏についての悪評は多い。権力を失えば裁きを受けると言われている彼は、それを避けるために国の危機を使って自分の権力を維持していると見られている。筆者には、ネタニヤフ氏が自身の理念もないうまま、イスラエル人の極端で多種多様な主義主張が飛び交う混沌とした状況を利用して、首相の座にとどまるために妥協点を演じているように見える。

世界がイスラエルに注目する中、日本でもイスラエルやユダヤ人に関心が集まっているが、イスラエルの住民が均質であるかのような誤解が見られることがある。しかし、イスラエル国内にはユダヤ人もアラブ人²（パレスチナ人）も住んでおり、彼らは非常に多様だ。筆者は過去20年間にわたり、さまざまなユダヤ人に会って直接話を聞いてきた。その経験から、イスラエルの人々を一枚岩とみなす日本での言説に違和感を覚えてきた。本稿では、イスラエルのユダヤ人についての基本的な理解を深めるため、彼らの特性や多様性について解説し、ユダヤ人とのコミュニケーションにおいて工夫できる点や意識すべき点を述べる。

2. 「強さ」への渴望

イスラエルのユダヤ人社会では、離散の地での非ユダヤ人から暴力を受けたユダヤ人は「弱いユダヤ人」とみなされ、批判され、そして「強さ」が渴望されてきた。市川など³によれば、ユダヤの歴史は紀元前18世紀頃に遡り、ユダヤ民族の祖アブラハムが登場したことをひとつの起点とするようだ。紀元前1000年頃にはイスラエル統一国家が誕生し、エルサレムに神殿が作られ繁栄したが、王国が分裂し、周囲から滅ぼされ、

1 ユダヤ教正統派においては、ユダヤ人の母親から生まれた人、またはユダヤ教に改宗した人を指す。これは、イスラエル国外のユダヤ人がイスラエルに移住するときに適用される帰還法でも採用されている定義である。とはいえ、世界にはさまざまなユダヤ人がいる。そのため厳格な意味でユダヤ教徒かユダヤ人をはっきりさせることが、本人にすら難しい場合がある。DellaPergola (2023)は、「自分はユダヤ人だ」と考えている人をゆるくユダヤ人とみなしている。本稿でも「ユダヤ人」という宗教と民族が一緒になったようなゆるい概念で考える。

2 イスラエルに住んでいるパレスチナ人のことをイスラエリ・アラブと呼ぶ。本稿ではパレスチナ自治区に住んでいるパレスチナ人と区別して、イスラエルに住んでいるパレスチナ人のことを以下、「アラブ人」と呼ぶ。

3 市川 (2019、2015)、嶋田 (2012)

ユダヤ人はバビロニアに連れて行かれた。その後、彼らはエルサレムに戻り、神殿を再建したが他者から迫害され続けた。ユダヤ人は2つ目の神殿を建てたがローマ帝国によって破壊され、エルサレムへの出入りを禁止された。その後、祖国を失ったユダヤ人は世界各地を流浪し、「離散（ディアスポラ）」状態になった。北アフリカ・地中海地域ではイスラム教徒とそれなりに穏やかに過ごし繁栄した一方、ヨーロッパではキリスト教徒から差別や迫害を受けることになった。中でも19世紀にロシアで繰り返し起こったユダヤ人への襲撃「ポグロム」やヨーロッパであまたの迫害を受けた苦い経験は、ユダヤ人に自分の国を持つ必要性を強く感じさせた。

知識層の中には、「他人の国家」で差別や迫害を受け続けるよりも、「自分たちの国家」を作ってそこに住めば、これ以上の被害を避けられるという考えがあった。これがシオニズムだ。建国の地として

は、パレスチナの他にもアフリカや南米などの候補があったが、最終的にはパレスチナが選ばれた。第二次世界大戦中のホロコーストを経て、1947年に国際連合がパレスチナ分割案を採択し、1948年にイスラエルが建国された。以後、イスラエルはパレスチナを占領し続け、戦争が繰り返されている。

イスラエルに対するドイツをはじめとするヨーロッパ諸国の批判が控えめなのは、ユダヤ人が過去に自分たちの国で受けた被害に対する償いとして、イスラエルが存在するからだ。イスラエルのユダヤ人からすれば、受けた被害に対して加害者から償いを受けるのは当然のことだ⁴。

第二次世界対戦後、ドイツや日本では戦争で他国の人々を傷つけたことが猛省されたが、イスラエルでは「弱かったせいで何もできずに殺された」ことが情けなかったと反省された。彼らは「強さ」を渴望し、イスラエル国家を維持するためには戦い続けなければならないという思考回路から抜け出せない。その状況や考えは、自国の存続について心配不要な他国の人々には理解されず、イスラエルは国際社会で孤立している。

3. ユダヤ人とイスラエル社会の多様性

イスラエル統計局は、毎年5月のイスラエル独立記念日前に人口統計を発表している。2024年5月のデータ⁵によれば、現在の人口は約990万人で、そのうち約73%がユダヤ人、約21%がアラブ人（主にイスラム教徒。少数のキリスト教徒、ドゥルーズ派）、そして約6%がその他の人々である。2023年5月から2024年5月までの間に約20万人が生まれ、3万7千人が移入しており、人口は1.9%増加している。建国以来、合

筆者紹介

エルサレム・ヘブライ大学に客員研究員として所属し現地で行った調査をもとに『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』（2014）を執筆し、東京大学で博士号（文学）を取得。世界各地のユダヤ人の文化活動を観察している。ユダヤ人と一緒にイディッシュ語、ユダヤ・スペイン語（ラディノ語）、ヘブライ語を学び、これらの言語で話すことによって、ユダヤ人の生の声を集めている。現在、フランス国立東洋言語文化学院と東京大学の研究員としてパリのユダヤ人を調査中。単著『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』（三元社、2014年）、共著『Pen BOOKS ユダヤとは何か』（CCCメディアハウス、2012年）、『イスラエルを知るための62章』（明石書店、2018年）、『Figaro BOOKS 私が目覚める読書案内』（阪急コミュニケーションズ、2013年）、ヘブライ語からの訳書『アンチ』（岩波書店、2019年）など。現地でのフィールド調査で得た情報を交えて綴った連載「パリとユダヤ人」（雑誌『ふらんす』白水社、2023年4月～2024年3月）、インタビュー『「その他の外国文学」の翻訳者』（白水社、2022年）も参照されたい。

4 ポグロムやホロコーストの記録やそれを扱った文学をイディッシュ語で読むと、「リベンジ」という単語が頻繁に出てくる。執拗ないじめや殺戮に武力で対抗できなかったユダヤ人たちは、受けた苦しみの内容を詳細に記録して、後々加害者に償わせようとした。「弱い」ユダヤ人には、それくらいしか抵抗の手段がなかった。

5 イスラエル中央統計局（2024）

計340万人余りがイスラエルに移住した。ユダヤ人の自然増加と移住、そしてアラブ人の自然増加は、建国時81万人弱だった人口を現在までに12倍にした。このまま人口増加が続けば、来年の独立記念日には1千万人を超える予測だ。現在ではイスラエル生まれのユダヤ人はイスラエルに住むユダヤ人の80%と圧倒的な多数派を占めている。高齢者が少ない社会構造で、0歳から14歳が全人口の28%、65歳以上が全人口の12%で、人口ピラミッドは若者が多い⁶。

イスラエルは移民国家で、移民たちはもちろん、イスラエルで生まれた移民の子や孫も、移民たちの出身国の文化や言語、そしてメンタリティを維持している。そのためイスラエル社会をよく知ろうとするのなら、移民たちの出身国を知ることも大切だ。イスラエルへの移民の数が目立って多い国々を順にみると、ロシア・旧ソヴィエト連邦、モロッコ、イラク、ポーランド、アメリカとオーストリアとニュージーランド⁷、イラン、イエメン、アルジェリアとチュニジア⁸、そしてエチオピアである。以上のイスラエルへの移住者が目立って多い国々だけを見ても、イスラエルにはさまざまな文化を持ち、言語を話す人々がいることが分かるだろう。実際はさらに多様だ。彼らは、移住を機にイスラエルの公用語である現代ヘブライ語⁹（以下ヘブライ語）を習得し、イスラエル社会に同化する。移民たちは、自分の子どもをヘブライ語を「母語」として話す生粋のイスラエル人「サブラ（ヘブライ語でイスラエル生まれの人を親しみを込めてこう呼ぶ）」にすることを目指す。実はこの多様なユダヤ人たちは二つの大きな系統に分けられる。

ユダヤ人の2大系統：アシュケナジ系とスファラディ系。そしてミズラヒ

ユダヤ人は2大系統に分類される。まず日本で最も知られているアシュケナジ系（ヘブライ語で「ドイツの（人）」）そしてもうひとつがスファラディ系（セファルディとも。「スペイン（の人）」）だ。

アシュケナジ系ユダヤ人はその名の通りドイツ、そして東欧にルーツをもつユダヤ人である。度重なる反ユダヤ主義などを機にロシアに移住した人たちもいる。そしてスファラディ系ユダヤ人はその名の通りスペイン、そしてポルトガルにルーツをもつユダヤ人である。スファラディ系は1492年のスペインでのユダヤ人追放令が発布されると、3つの選択肢から選ぶことを迫られた。それは、①ユダヤ教徒としてそこで処刑されるか、②カトリックに改宗してそこで生きていくか、あるいは③ユダヤ教徒として生き続けるために逃げるかだった。このとき③を選び、北アフリカ、南ヨーロッパなど地中海地域に離散して生き残った人々の子孫が現在のスファラディ系ユダヤ人である。

ユダヤ人であることは共通でも、系統が違くと差異が生まれる。ユダヤ人は系統によって居住地域とその地域の環境、そして宗教上の指導者が異なる¹⁰。そのため、彼らの宗教的な解釈や伝統、文化、生活、言語などに違いがある。例えば祈祷所の構造や、祈祷の際の服装、そして祈祷で使うヘブライ語の発音や歌のメロディなどが異なる。言語の視点で言えば、アシュケナジ系の多くはイディッシュ語（かつてユダヤ・ドイツ語と呼ばれていた）というユダヤ人の独自言語を、一方スファラディ系の多くはユダヤ・スペイン語（ラディノ語、ジューズモとも呼ばれる）というユダヤ人の独自言語を使い、さらに各居住地の非ユダヤ人が話していた言語も使っていた。

6 イスラエルは若年層が多いがKaidar et al. (2024), Ghert-Zand (2024)によれば長寿国家でもあり、高齢者への社会保障が今後不十分になることも危惧されている。

7 この統計ではまとめて一つの項目にされている

8 同上

9 現代の日常生活で使うヘブライ語を聖書ヘブライ語などと区別してこう呼ぶ。

10 ただし、イスラエルなどではスファラディ系でもアシュケナジ系の指導者を選ぶことも少なからずある。

そして、ミズラヒ（「東の（人）」）と呼ばれているユダヤ人もいる。ミズラヒは、モロッコから中央アジアに渡る広範囲に分布していたユダヤ人たちのことを指す。彼らの特徴は、イスラム地域に住んでいたこと、そして、ヨーロッパに住んでいなかったことだ。彼らは、系統ではスファラディ系に分類される。言語については、モロッコやイラクなど、アラビア語が話されている地域に住んでいた人たちはアラビア語を話すことができるし、イランに住んでいた人たちはペルシャ語を話すことができる。イスラエル建国や度重なる戦争を機に、故郷であるイスラム地域を離れてイスラエルに移住した人が多いことも特徴だ。

多様な移民たちのヘブライ語の習得によるイスラエル化

多様な言語を話していたユダヤ人が世界各地から集まるイスラエルでは、ヘブライ語を話すことが理想とされた。移民たちは自らも「イスラエル人らしい」ヘブライ語の習得に努め「イスラエル化」していった。子どもが生まれると、離散の地を連想させる移住前の言語を子どもに継承することを注意深く避けた。その中でも特に避けられたのが、イディッシュ語¹¹やユダヤ・スペイン語といったユダヤの独自言語や、アラビア語やペルシャ語といったイスラム地域の「敵」の言語である。ヘブライ語の習得はイスラエル社会に溶け込むために必須だ。そのため移民たちは移民同士で移住前の言語を使っていたとしても、子どもとはできるだけヘブライ語で話すようにする。

ヘブライ語を習得しイスラエル社会に同化することは、移民たちが教育や仕事でより多くのチャンスを得て、より豊かに生活するために欠かせない。国家を挙げて移民たちをイスラエル化しているため、ヘブライ語を習得する仕組みは非常によくできている。子どもは移民であっても学校教育を受けるうちに自然とヘブライ語を習得する¹²。若年層の移民は、大学、街中、兵役に設置されているヘブライ語講座「ウルパン」でヘブライ語を効率的に学び、街中で多くの実践の場を得ることができる。移民社会イスラエルの人々はヘブライ語初心者と話すことにも慣れており、活用に間違いがあれば直してくれたり、諦めそうになっていたら激励してくれたりする。筆者もいろいろな人に助けられたが、彼らの多くが移民やその子ども、そしてイスラエルのアラブ人だった。本人たちも学習者の苦勞を知っているのだろう。

宗派や各宗派の派閥の多様性

イスラエルのユダヤ人は約半数が世俗的なユダヤ教徒で、その他はさまざまな宗教的スタンスを持っている。シンクタンクのイスラエル民主主義研究所は、20年以上にわたり『イスラエル民主主義指数¹³』という世論調査をまとめている。この調査によると宗教的スタンス（イスラエルの全ユダヤ人人口に占める割合）は宗教から距離をおいて生活する「世俗的（Secular）」（45.6%）、ユダヤ教の伝統は大切にしないが宗教的ではない「伝統的で世俗的（Traditional non-religious）」（19.4%）、ユダヤ教の伝統を大切にしない宗教的「伝統的で宗教的（Traditional religious）」（12.3%）、民族主義的で宗教的「民族主義的で宗教的（National religious/national ultra-Orthodox）」（11.5%）、ユダヤ教の教えを厳格にまもり近代的な世俗文化を拒否する「超正統派（Haredi）」（11.2%）¹⁴である。

11 イスラエルにおけるイディッシュ語話者減少の経緯については鴨志田（2014）を参照。ユダヤ・スペイン語など他の離散の言語も、似た経緯をたどって話されなくなった。

12 逆に、学校なしではヘブライ語が定着しない。例えば新型コロナウイルス感染拡大で、子どもが登校できなかった時期に、家庭でヘブライ語以外の言語を使っていた多くの子どものヘブライ語力が落ちたことが社会問題になった。

13 Hermann et al. (2024)

14 Hermann et al. (2024)p.228、それぞれの分類についての説明は筆者がつけた。

「超正統派」は、ユダヤ教のきまりをとて厳格にまもる。きまりを逸脱する世俗的な生活を否定して避け、インターネットなどのテクノロジーも非常に限定的に使う。中にはユダヤ人の近代国家としてのイスラエルの存在に反対する派閥もある。「民族主義的」な人々はユダヤ人の権利を拡大することに注力している。イスラエルのユダヤ人に宗教的な立場を聞けば、自分自身を「世俗的」だとか、「超正統派」だなどと分類しているし、さらに派閥や個人の主義主張を持っている。つまり、ひとつの分類に属する人が周りや過去の自分と同じことを考えているとは限らない。宗教的なスタンスを人生の途中で変える人も度々見る。イスラエルは日本よりも個人主義的で、特に世俗派の間では個人の考えを尊重する傾向が見られる。そのため、生まれ育った家庭の他メンバーとは違うスタンスを持ち、例えば「親はとても宗教的だが自分は違う」と言う人もいるし、スタンスが異なる人と結婚することもある。独身時代は世俗的でも、結婚して子どもができれば、ユダヤの伝統の中で育児したいと考える人もいる。ユダヤ人の宗教との付き合い方については、本人たちから直接聞くのが一番よい。ユダヤ人たちが悩みや葛藤の中でユダヤ教と向き合っているのがわかる。

世代の違いによる多様性

イスラエルのユダヤ人の間にも世代間ギャップが存在する。戦争や紛争が常態化しているイスラエルでは、時代によって周りの状況や受けた教育が大きく異なる。イスラエル建国前やその直後に生まれた世代は、イスラエルが経済的に貧しかった時代を知っている。一方、生まれた時からイスラエルという国が存在した世代、特に若年層は、豊かになったイスラエルの姿だけを見ている。

宗派や出身地だけでなく、世代も多様性を生むひとつの要因となっている。イスラエルのユダヤ人を理解するためには、出身国、系統、宗派、世代など、複数の視点から彼らを見る必要がある。さらに家庭環境や教育などの要素も重要だ。

4. 現代のイスラエル政治と世論

イスラエル国内には極めて多様な人々が住んでおり、ユダヤ人だけを見てもイスラエルの政治にすべての人たちの意見を反映することは不可能だと想像できるだろう。ユダヤ人がよく言うことわざに「ユダヤ人が2人いれば、政党が3つできる」がある。これはユダヤ人には議論をするのが好きな人が多いので、ユダヤ人が2人いると議論が始まり、意見は1つにまとまるどころか2つにもおさまらず、なんと3つ出てきてしまって話が混乱するという笑い話だ。イスラエルでは世界から集まった多様なユダヤ人が、さまざまな文脈で、さまざまな主義主張をする。各々が違う意見を持つのが当然だという考えが浸透しているので、それを表現することには遠慮も妥協もない。彼らの議論は「問題解決や考えを発展させることに議論が役立つ」という前提のもとに成り立っている。彼らの激しい意見のぶつかり合いが見られる場のひとつが、イスラエルの政治だ。次ページの表1に、イスラエル国会における政党名と各党の主義主張などを示した。

表1の政党ごとの主義主張から、それぞれ理想の国家像が大きく異なること、多くの国民の関心がまず自分たちの生活や権利に注がれていること、パレスチナ問題よりも国内の政治や経済の方に関心が強いことがわかる。ユダヤ人の政党には宗教的なスタンスの違いがあり、これがそれぞれの主義主張に大きく影響している。詳しくは立山(2018)を参照されたい。

それでは以下、大まかに極右から極左を見ていく。ユダヤ人の政党は超正統派か、超正統派ではないが宗教的か、世俗的かに分類できる。超正統派や、非超正統派による宗教的な政党には、極端な右派が多いが、そうとも限らない。各々、理想の宗教国家を掲げている世俗政党に注目すると右派から極左までに分かれて

表1 イスラエル国会に議席がある政党名、議席数、特徴、創設年、主義主張（2024年7月現在）

(与党)				
政党名	議席数	特徴	創設年	主義主張
リクード党	32	右派	1973	自由市場推進、民営化推進。一方で、生活困窮層にも配慮。エリートを攻撃。宗教政党と組む。大イスラエル主義を支持。
シャス党	11	宗教 (超正統派)	1984	伝統的スファラディ系ユダヤ人コミュニティの威信回復。社会的に恵まれないスファラディ系ユダヤ人正統派の権利、宗教教育、生活支援。離散ユダヤ人のイスラエルへの呼び寄せ。アラブ諸国との和平協定支持。エルサレム分割反対。
宗教シオニスト党	7	宗教、極右	2021	イスラエルにおけるユダヤ教の役割を強化、宗教教育の充実。ヨルダン川西岸入植地を拡大し、イスラエル主権下に置くことを支持。国家の安全保障を最優先。
トラー・ユダヤ連合 (イスラエル連盟党、 トラーの旗党の連立)	7	宗教 (超正統派)	1992	教育、福祉、兵役などにおける超正統派の利益促進。国家における宗教維持。宗教的価値観から立場を決定する。
ユダヤの力党	6	宗教、極右	2012	ヨルダン川西岸から地中海までがイスラエルと主張。パレスチナ国家樹立反対。
ノーム党	1	宗教、極右	2019	厳格なユダヤ教の考え方を国家にシステム導入することを支持。
(野党)				
政党名	議席数	特徴	創設年	主義主張
イエシュ・アティド党	24	中道、リベラル・シオニスト	2012	教育重視。全国民の平等な兵役と奉仕、選挙資格の拡大を主張。国家の安全保障問題より社会問題、市民問題、統治問題に重点。
国民連合（青と白党、 新希望党の連立）	12	中道、シオニスト	2022	ユダヤ民族の国民国家としてのイスラエル支持、民主主義と三権分立を重視。
イスラエル我が家党	6	右派	1999	もともと旧ソ連からの移民、世俗的な右派にアピール。外交政策と安全保障で強硬姿勢、パレスチナ人とユダヤ人は、それぞれ別の国家をつくるべきと主張。
ラーム党(統一アラブ リスト)	5	左派、アラブ	1996	エルサレムを首都とするパレスチナ国家の樹立、占領終結、入植地解体を支持。パレスチナ人の囚人釈放と難民帰還、アラブ人のための権利保障、教育制度の格差是正、大学設立、工業地帯開発を支持。
ハダシュ・タアル党 (ハダシュ党、タアル 党の連立)	5	極左、ユダヤとアラブ	2019	ユダヤ人とアラブ人の平等の権利などを支持。
労働党	4	左派	1968	イスラエル建国では中心的な役割。社会的公正、平和、経済的安定。イスラエルとパレスチナの二国家解決、中東和平。

イスラエル国会とイスラエル民主主義研究所のウェブサイト¹⁵、報道などをから筆者作成

15 “Members of 25th Knesset,” “Elections and Parties”

いる。まず、与党第一党のリクードや、野党のイスラエル我が家党は右派である。一方で、議席の獲得数で野党第一位のイエシュ・アティド（未来がある）党と第二位の国民連合はどちらも中道で、イスラエル国内の社会問題についての議論に重点をおいている。左派を代表する労働党は、その前身がイスラエル建国で中心的な役割を果たした歴史のある党である。それにもかかわらずこの党の人気の現在下火なのは、この党が掲げる理想が、右傾化している現在のイスラエル社会からかなり乖離しているからだろう。左派では労働党よりむしろ、ユダヤ系の極左政党であるハダシュ（新）党がアラブ人系タアル党と組んで、労働党よりひとつ多く議席を確保しているのが目立つ。ラーム党（統一アラブリスト）はアラブの政党で、パレスチナ国家の樹立の他、イスラエル国内でのアラブ人の生活向上のための政策を求め、アラブ人の権利の拡大を求めている。

イスラエルの右派や左派、保守派や革新派を日本の分類と同じように見ると分からなくなる。日本では右派が保守的で左派が革新的な印象だ。一方イスラエルでは、右派が革新的な勢力で、左派が保守的な勢力である。例えばパレスチナや国内のアラブ人に対して右派は強硬姿勢をとり、左派は穏便な態度をとる。彼らは右派はもちろん左派であっても、日本人の一般的な感覚からすると、遥かに愛国心が強い。筆者は、自国を強く批判するイスラエル人は、愛国心が強いからこそ自分の理想と国家の現実のズレに我慢できないのだろうと考えている。

イスラエルのユダヤ人がどの政党を支持するかはある程度固定化しており、日本人よりも政治的スタンスを明らかにする傾向がある。政治的スタンスに個人の所属する宗教や系統、宗派、そして出身地の受けた教育や人生経験、現在の生活など、さまざまな要素が影響している。議席を獲得していない政党も含めれば、さらに多くの主義主張があり、イスラエルのユダヤ人の考えの多様性を垣間見ることができる。

『イスラエル民主主義指数2022』の「世代別の政治的志向¹⁶⁾」をみると、中高年よりも若年層にパレスチナ人への強硬姿勢をとるユダヤ人が多く、その割合が時代の経過とともに増えている。イスラエルのユダヤ人社会は、時間とともに右傾化していることが分かる。イスラエルとパレスチナの過去の関係が現在よりも良好だったことを知っている世代には、パレスチナ人とより穏便な関係を築けるはずだと期待している人々がそれなりにいる。しかし、双方の関係が悪い時代しか知らない若年層は、双方がコミュニケーションを取ることすら難しいと感じてパレスチナへの強硬姿勢をとる傾向がある。

これまで筆者は、ユダヤ人同士のさまざまな議論を見てきた。冷静なまま終わる議論も、感情的になって大声になる議論もあった。しかし、いつも暴力に発展することなく収束した。議論の後にネチネチと引きずる様子はなく、必要があれば新たに議論する。ある程度の信頼関係を保ち正面から議論できる限りは、相手に手を出したりする必要はないのかもしれない。非暴力の戦いをパレスチナ問題の解決にも応用できないのだろうか。

5. イスラエルのユダヤ人を理解するために

これまでの記述を前提に、ユダヤ人を理解するためのポイントをいくつか挙げる。

イスラエルのユダヤ人は「強さ」を美德としているが、彼らは表面的には強く見えても、内面が脆い場合があるので考慮や配慮をする必要がある。とくに迫害のトラウマに対してとても弱い。非ユダヤ人から攻撃

16 Hermann et al. (2022)p.27

されたり、否定されたり、見捨てられたりすることで彼らは「またか」と傷つき、失望し、非ユダヤ人に対する不信感を強めて内向きになってしまう。とくに2023年10月7日のハマスからの襲撃は、ユダヤ人にとって大きなトラウマとなっているので、無関心な態度や否定的な態度を避け、配慮しながら接したい。

我々は現状の理解に自分の言語での報道などを頼りがちだが、彼らの視線で見た世界も理解しようと努力する必要がある。イスラエルと敵対している勢力とイスラエルを比べて「どちらが悪い」と早急に判断して押し付けず、まず当事者目線でどう見えるかを当事者たちに説明してもらおうとよい。

相互理解のためには積極的な対話が不可欠だ。イスラエルのユダヤ人は、相手を理解するために初対面でも積極的に質問をしてくる。現地で、あるアラブ人が筆者に「ユダヤ人はたくさん質問してくるだろう？それは不安だからだ」と言った。筆者はアラブ人もユダヤ人のことをよく観察しているのだなと感じつつ、質問が不安の解消のためであれば、それに明確に答えることで相手の不安を和らげることができるかも知れないと考えた。相手の質問にはていねいに答えて、興味があればこちらからも同じような質問を返しても良い。相互理解が深まるだろう。質問は失礼には当たらない。むしろ本質を捉えた質問は、考えの深さから生まれるものとして高く評価される。時間をかけてていねいに彼らのことを観察して、知りたいことがあれば直接話を聞くことが有効だ。出身地、宗派、受けた教育などの情報も得られれば、なぜその人がそう考えているのかを理解する助けになる。

本稿の読者には、ビジネスでユダヤ人と交渉する方も多いただろう。彼らは交渉を得意としていて、最大限の利益を得ることを目指している。「図々しさ（フツパ）」は彼らにとって恥ではない。交渉の際に疑問や要求があれば積極的に伝えると話が早くなる。双方が成果に満足できれば、とても良い交渉ができたことになる。成果はお金など数字で見えるものだけでなく、信頼や信用、新しいネットワークや情報など、目に見えないものも多い。長期間に渡って良い関係を築きたければ、後者は不可欠だ。

6. まとめにかえて

イスラエル人は多くの場合、日本に対してポジティブなイメージと強い関心を持っている。そのため、こちらが積極的に相手を理解しようとする姿勢を持てば、コミュニケーションを始めるのは難しくない。

一般的なことだが、異文化を理解するためには、相手に歩み寄り、相手の視線で物事を見るのが不可欠だ。イスラエルのユダヤ人と接する場合には、その人や先祖がどこでどんな歴史を歩んで、いつイスラエルに来たのかを聞くとその人の家族のことが分かる。そしてその人がどこでどんな教育を受け、今どんな状況におかれているのかについて聞くと、その人を理解しやすくなる。少し時間がかかっても「急がば回れ」で信頼関係を築き、腹を割って話し合える関係をつくりたい。きっと、思った以上の成果を得られるはずだ。

ユダヤ人は議論が好きで交渉も得意だと言われているが、パレスチナ問題についてはまだ解決できていない。双方は暴力によるコミュニケーションを継続するしかないのだろうか。筆者にはイスラエルとパレスチナの未来像が見えない原因が、双方や関係する国々の間でこのテーマについて議論できていないことだけではなく、そもそもユダヤ人の間で十分な議論ができていないことにあるように見える。彼らは解決することを諦めてしまっているのだろうか、それとも解決しないことに決めているのだろうか？じっくり彼らに話を聞いてみる必要がある。

【参考文献】

市川裕（2015）『ユダヤ教の歴史』河出書房新社

市川裕 (2019) 『ユダヤ人とユダヤ教』 岩波書店

鴨志田聡子 (2014) 『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』 三元社

嶋田英晴 (2012) 「蘇ること4000年、ユダヤの歴史を知る。」 In : 市川裕監修、ペン編集部編 『ユダヤとは何か。聖地エルサレムへ』 CCC メディアハウス、pp.15-18

立山良司 (2018) 「拡大するシオニズムの宗教的側面：イスラエルにおける政教関係の変化」 In : 『国際問題』 編集委員会 編 (675)、pp.18-28

DellaPergola, Sergio (2023) “World Jewish population 2022,” In *American Jewish Year Book 2022*. Edited by Arnold Dashefsky and Ira Sheskin. Cham: Springer

Hermann, Tamar et al. (2023) *The Israeli Democracy Index 2022* (The Israel Democracy Institute) <https://en.idi.org.il/media/19697/the-israeli-democracy-index-2022.pdf> (2024年7月14日参照)

Hermann, Tamar et al. (2024) *The Israeli Democracy Index 2023* (The Israel Democracy Institute) <https://en.idi.org.il/media/24389/the-israeli-democracy-index-2023-english.pdf> (2024年7月14日参照)

Kaidar, Nir et al. (2024) “Long-Term Care Insurance in Israel” <https://www.taubcenter.org.il/wp-content/uploads/2024/03/LTC-ENG-2024.pdf>, Taub Center for Social Policy Study (2024年6月28日参照)

“Elections and Parties,” <https://en.idi.org.il/israeli-elections-and-parties/>, The Israel Democracy Institute (2024年7月1日参照)

“Elections 2022,” <https://en.idi.org.il/israeli-elections-and-parties/elections/2022/>, The Israel Democracy Institute (2024年7月1日参照)

“Israel’s Independence Day 2024,” https://www.cbs.gov.il/he/mediarelease/doclib/2024/141/11_24_141e.pdf, Central Bureau of Statistics (2024年6月28日参照)

“Members of 25th Knesset,” <https://main.knesset.gov.il/en/mk/apps/mklobby/main/current-knesset-mks/all-current-mks>, The Knesset (2024年7月1日参照)

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。